

フキノトウも平地においては既に開ききっており、水田の春の耕起も始まっております。いよいよ春の農作業本番となってきました。

**圃場管理について**

○越冬野菜の手当て（追肥と降霜対策）

露地の越冬野菜は、雪の重みで地面に張り付いています。漸く越冬した野菜たちも腹ペコ状態です。土壌表面の水気が少なくなってきたら、早めに「そさい3号」か「そさい5号」を、1aあたり2kgから4kg施用し中耕・土寄せを行なって下さい。なお、この時期有機質肥料は地温が低いので、施用してもなかなか効いてきません。そさい3号などは速効性が有りますが、雨による流亡も多いので一度に多く施用しても無駄になることもありますので、少量づつマメに施用すると効果は高くなる。なお、有機質肥料と速効性のそさい3号など化成肥料を混合して施用すると肥効が連続するので、こうした方法でもよい。



施肥中耕で伸び始めた玉ネギ

4月中旬までは遅霜が降りる恐れがあります。越冬作物に敷きわらやモミガラをしっかりと敷きなおしている圃場も見られますが、こうすると地面からの夜間放熱が遮断されるため、作物が霜害をより強く受ける恐れがあるので、あまり厚く敷かず順次積み足してゆきましょう。降霜に備えてベタガケ資材を準備しておくとなお良いでしょう。

**ジャガイモの準備**

これまで、何回も書いておりますので、要点のみ記しておきます。

イモは早めに切断して、切り口には何もまぶさない。(灰などを付けることは、植え付け直前に切断した場合で、緊急的な対策である。)

そうか病が発生した圃場では連作をしないことが第一である。本病は土壌がアルカリ化していると発生し易くなってくるので石灰は控え目にする。なお、土地の余裕がない場合はネビジン、フロンサイドといった殺菌剤を土壌混和する方法もあり発病を軽減できますが、完全に防除できるものではないことを承知の上使用して下さい。ジャガイモは窒素肥料を与えすぎると、茎葉が過繁茂となり病害虫に犯され易くなると共に、食味も上がらないので注意する。



動き始めた春キャベツ。

1aあたりの施肥例（畑によって条件はそれぞれ違います。一応の目安です。）

圃場区分	石灰資材	肥料銘柄	施用量	追肥と注意事項
よく使う畑	0～2 kg	大豆化成 550	10～12 kg	生育状態をみて、土寄せ時に そさい3号か5号を2～3kg施用する。 (注意) 畑に入れてしまった余分な肥料は 取り出すことが出来ない。作物には腹八分 目の施用を心がけ、過繁茂にしない。
秋作の無 かった畑	3～5 kg	有機化成 A801 ようりん	10～12 kg 2～3 kg	
新しい畑	6～8 kg	あさひ ようりん	10～12 kg 3～5 kg	

**ハウスの管理**

3月から4月は外気温は低くても陽射しは強いので、換気を怠ると40℃を超える高温になります。一方夜間は、外気温+1～2℃程度で、かなり冷え込みますので、トンネル被覆やベタガケなど保温対策を充分にして下さい。特に育苗中は最高最低温度計で、気温の推移を確認しながら管理して下さい。

栽培中の作物では、意外と土壌の乾燥が速いので、適宜灌水を行なって下さい。特に、ECの高い圃場では、土壌の乾燥により、より強く障害が出やすいので注意しましょう。

また、ハウス内に雑草や栽培作物以外の管理されていない野菜が残っていると害虫の越冬場所となっていますので、害虫が動き出す前に、早急に処分して下さい。

◎播種、育苗について

4月に入ると露地栽培野菜の育苗が始まります。適切な培地を準備しましょう。

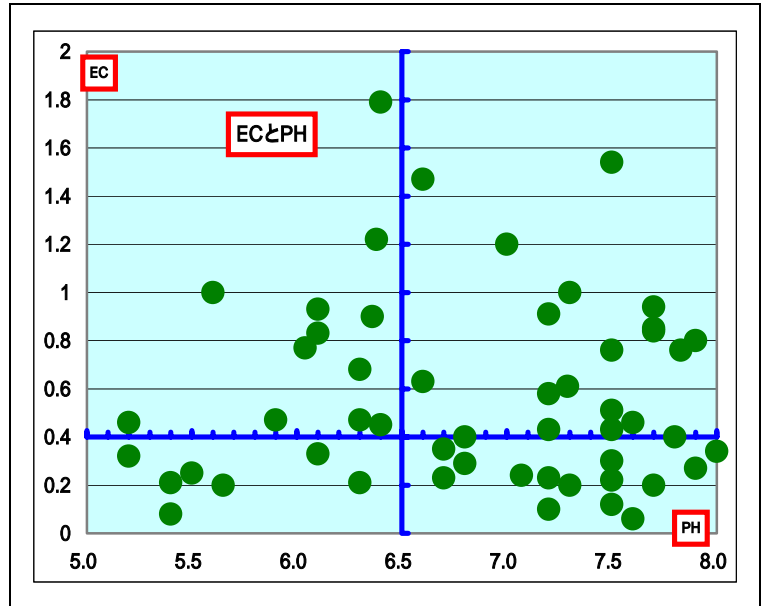
培地の準備：信頼ある調整培地を購入、使用を勧めます。あまり安価な培地はカビの発生や水の浸透性などに問題があり、種代を損失すると結果的に経費高となってしまいます。自家調整する場合は、畑作病菌の少ない田土を乾かして砕き、下記の目安で混和し調整しましょう。

自家培土調整の目安	田土など (フル掛け)	ピートモ ス	与作 (パーミキュライト)	モミガラ くん炭など	そさい3号 (土量 100当たり)
種まき用 (播種箱、セルトレイ、ペーパーポットなど)	50%	25%	25%	—	10~15 g を粉砕し使用
種まき用 (ポリポットなど)	50%	20%	20%	10%	
育苗用	50%	20%	20%	10%	10~15 g
注意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>基本的に堆肥は使用しない。</li> <li>使用前に乾燥が進んだ場合は、充分灌水しておく。</li> <li>高温期の播種・育苗では日中直射日光が当たると、発芽しだちや幼苗期は土壌表面が陽射しで高温になり障害が発生するので注意する。</li> </ul>				

## 土壌分析について

ハウス土壌は、降雨に晒される事がないので、作物が吸収し残した肥料分や、肥料・堆肥などに含まれる不純物などが残留、蓄積し作物が作りづらくなってきますので、土壌分析を推奨しています。最も基本的なPHとECの本年の分析結果を図で表わしていますが、PHで7.5以上、ECで0.8以上の圃場については特別な対応が必要になります。まだ分析をしていない圃場は、作付けまでに必ず分析を行なって下さい。

また、土壌については化学性だけではなく、排水性や土の固さなど物理性も生育に大きく影響します。長年使っていると耕盤が形成されて根の伸長が妨げられているので、土を掘って観察して下さい。耕盤が認められるなら、深耕を行ないましょう。



## マルチの選択について(種類と機能)

マルチは肥料流亡を防ぎ、土壌を柔らかい状態で保つとともに、地温保持や抑制、雑草発生の抑制、乾燥防止等の目的で使用されます。作物の生育促進効果は明らかで、敷設の効果は高いがマルチの選択が適当でないと効果を発揮できなくなります。

☆透明マルチ、緑マルチ・・・4月中の定植に使用すると地温上昇効果が高いので、初期成育が良くなります。生育後半で雑草が心配ですが、マルチの中は高温になる事とマルチが伸長を押さえ込むので心配するほどのことはありません。また、マルチの上からワラをかぶせるなどして草を抑える方法もあります。緑マルチは抑草効果があります。

☆黒マルチ・・・雑草発生抑制の目的で使われる。地温も上がらないので、5月中旬以降の定植に使います。高温期は直射日光でマルチ面の温度が非常に上がるため、植えた苗の葉がマルチに触れると部分的に枯れる事がよくあります。

☆シルバーマルチ、白黒ダブルマルチ・・・雑草と地温抑制、並びに光の反射によりアブラムシの忌避効果も期待できる。従って、7月以降の高温期に使用されることが多い。シルバーマルチは伸びが少なく、裂けやすい傾向がある。

☆敷きワラ・・・マルチフィルムではないがワラは雑草発生抑制、乾燥防止、夏場での地温抑制、泥の跳ね返し防止などに有効であるばかりでなくスイカなどの蔓がワラを掴むため安定するのでよく使われる。



ハウスの上土をめぐって露出した耕盤。

J A 常置の家庭菜園用肥料の紹介

			
<p>イモ肥料。特に馬鈴薯、甘藷に向く</p>	<p>花、野菜一般の有機入り肥料</p>	<p>2/3 が有機の果菜類向き肥料</p>	
			
<p>玉ねぎ、人参、ニンニク等、追肥にも使える。</p>	<p>有機栽培用の野菜追肥</p>	<p>アブラナ科野菜に必要な微量元素</p>	
<p>風のある時も撒まける粒状石灰</p>			
			
<p>酸度矯正力が強い。</p>	<p>根にやさしい腐植酸を含む</p>	<p>直前でも撒ける有機石灰</p>	<p>苦土入りで使い易い。</p>